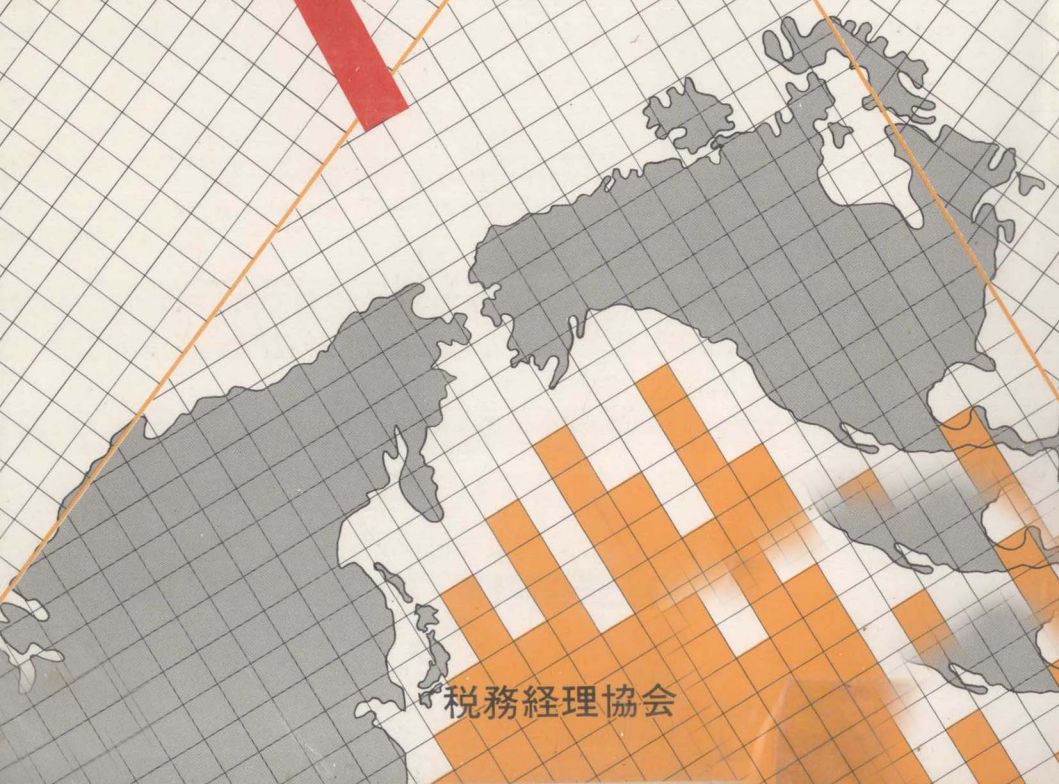


現代世界と 日本の経済

● 其の発展と破綻の軌跡

菰淵正晃



税務経理協会

現代世界と 日本の経済

●—その発展と破綻の軌跡

荻淵正晃

著 者 略 歴

1953年東大経済学部卒業。その後大学院博士課程を経て、現在芝浦工大、法政大、鶴見大、神奈川大などに勤務。

『世界経済論』（学文社）、『戦後アメリカ景気循環史研究』（法大出版局）、『アメリカ経済論』（税経経理協会）、『資本制経済の構造と発展』（同）などの著作、その他論文多数あり。

著者との契約により検印省略

1033-0174-3911

昭和54年10月15日 初 版 発 行

現代世界と日本の経済

定 価 2,500円

著 者	堀 淵 正 晃
発 行 者	大 坪 半 吾
整 版 所	音羽整版株式会社
印 刷 所	税経印刷株式会社
製 本 所	三 光 社 製 本

発 行 所 東 京 都 新 宿 区 株 式 税 務 経 理 協 会
下 落 合 2 丁 目 5 番 13 号 会 社

郵便番号 161 振替 東京 9-187408 電話 (03) 953-3301 (代表)

乱丁・落丁の場合はお取替えいたします。

© 堀淵正晃 1979

本書の内容の一部又は全部を無断で複製複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者及び出版社の権利侵害となりますので、コピーの必要がある場合は、予め当社あて許諾を求めて下さい。

は し が き

第二次大戦後、世界資本主義経済はそのうちに種々なる問題をはらみながらも、ともかく一九六〇年代末ないし七〇年代初頭まで、一応曲がりなりにも統一的に発展しうる体制を維持し展開してきた。したがって今次大戦後の発展は、第一次大戦後わずか一〇年かそこらで一九二九年大恐慌が爆発し、戦後の発展に終止符が打たれざるをえなかったこととくらべるならば、より長期にわたる発展であったといってもよい。しかしそうした第二次大戦後の発展も一九六〇年代末ないしは七〇年代に入ると、ようやく終わりを告げ、新たな発展軌道を辿らざるをえないものとなってきた。一九七一年のドル金兌換停止は、戦後のそれまでの発展が終わったということを示す以外の何ものでもなかったのである。けれどドルの金兌換を基礎としてのみ戦後の国際通貨体制が組み立てられていたのであり、この体制をよりどころとして戦後の資本主義はともかくも、アメリカを中心として統一的に発展しうる体制を整え、展開していたからである。そしてこの兌換停止は、アメリカを中心として形成されてきた世界統一的支配機構が崩壊し、いわゆる多極化時代に入ったということをも意味するものであった。それまでの世界経済秩序は崩れ、途上国をも含めて各国の経済力に照応した新たな枠組みの形成を求めて、世界資本主義経済はきわめて流動的な局面を迎え、動揺を繰り返さざるをえないものへと変化してきたのである。

しかも兌換停止はその後の為替相場のフロート制への移行をもたらすとともに、いわゆる石油危機を惹起せしめる遠因ともなり、先進諸国は産油国の原油供給と価格によって大きく影響されざるをえないものたらしめられた。こう

して一九七〇年代に入り動揺の度合いを深めることになった世界経済は、それまでとは質的にも異なる枠組みの中で発展にあるともいえる。つまり先進諸国はもはや先進諸国の利害のみを中心として行動することは、許されないものとなってきた、ということである。世界経済はいまや発展途上国をも、その重要な有機的連関の一環として包括した、新たな枠組みを必要としてきているのである。それゆえこれまでの先進国の利害を中心に組み立てられてきた世界経済のフレームワークは、事実上すでに崩壊してしまったといってもよい。従来のフレームワークは現実にはぐわなないものとして否定されているのである。そして新たな枠組みの確立が今直ぐみられない以上、動揺はたえず繰り返されていかざるをえないものとなっているのである。

わが国の経済発展も一九七〇年代（昭和四五年以降）に入るにともない、それまでの発展とはいちじるしく様相を異にしてきた。たとえばそれまでは一ドル＝三六〇円として、円の為替相場に変動はないものとの前提に立って、ただひたすら国内のこのみを中心として経済発展を推進していくことができたが、一九七一年に円は戦後初の切上げに見舞われ、円相場を不変とする前提は崩れ去っていった。そして七三年春以降は固定相場制は変動相場制に移行していくことにより、円の為替レートはその時々々の事情によって大きく変動しうるものとなった。わが国経済はこうして円レートの変動という、これまでそうしたことによって左右されることのなかった、新たな「外的」要因によっていちじるしく影響を受けざるをえないものとなった。いいかえれば日本経済は新たな経済環境の中に投げ込まれたのである。為替レートだけではない。従来、輸出拡大主義を唱え、ひたすら企業の国際競争力の強化をおし進めてきた政府＝産業一体の「日本株式会社」政策は、貿易の継続的な大幅黒字、国際収支の巨額の黒字を定着させることにより、海外からのわが国に対する非難を強め、黒字縮小を迫る海外からの強い要求に直面せざるをえなくなっている。

一九七〇年代初めまでは到底予想もされなかった黒字減らしに、わが国は真剣に取り組まねばならない条件のもとに立たされているのである。

しかも一九七三年秋の石油危機に端を発した長期にわたる深刻な不況は、それまで低下を知らぬ一貫したわが国経済の高成長軌道を終結せしめ、「低」成長（しかし先進国の中ではいぜん世界一の「高」成長）へと転換させたのであって、いまわが国経済はこれまでとは違った軌道を辿らざるをえないものとなっているのである。それと同時に、あまりにも高成長を追求し過ぎてきたことが、いまやいわば裏目となって、種々なる形で高成長の歪みが社会的矛盾として深刻化し、これとともに国民大衆の幅広い強力な歪み是正、解消を求める色々な形態での運動をよびおこさざるをえないものとしたのであった。経済成長もこうした運動の盛上がりによって多少の修正を余儀なくされ、一定の限界を画されるところとなっているのである。

このように一九七〇年代に入ると、世界経済も、その一環としてある日本経済も、大戦後からそれまでの発展条件とは異なった条件のもとにあり、違った軌道の上に立たされることになった。これまでの発展軌道はもはや行詰まり、破綻してしまったといってもよい。だが一九七〇年代は単に経済的に大きく変化し、動揺を強めたというだけではない。政治的、軍事的にも情勢は大きく変わり、動揺の度合いを深めた一〇年間でもあった。アメリカのベトナムでの軍事的敗北とアジアからの一定の「後退」、そして一九七九年からの米中国交の正式樹立という画期的局面が展開していった。また長年にわたって戦争を反復し続けてきたエジプトとイスラエルとの、ともかくもアメリカの仲介による和平条約の調印がみられたのである。だが他方、アメリカに対して共同して戦ってきたベトナムとカンボジアとの武力衝突、そしてベトナムと中国との武力紛争といった、ソ連と中国との対立を背景にした、かつては予想もされな

った社会主義諸国間での戦争が発生し、資本主義と社会主義との体制的敵対関係と共存関係に対して、複雑な関係を加えるものとなっていった。また中東地域での政情不安はイランでの国王の海外への追放革命として展開し（一九七八年末）、それによって石油情勢はいっそうの混乱と価格上昇という事態をよびおこさざるをえないものとした。先進国はこれによってまたもや深刻な影響を受けざるをえなくなったのである。

本書はこうした激動の一九七〇年代末の年に立って、これまでの世界資本主義経済の発展と、その一環としてあるわが国経済の戦後の展開過程をふりかえり、その辿ってきた道程を考察し、経済成長のこれまでの軌道の行詰まりと破綻について、簡単ながら検討を加えてみようとしたものである。もちろんここでは、各々の問題について詳しく分析したわけではない。ここではそうしたことを目的としてはいない。そうではなく、一通り、誰にでもわかるようにできるだけ平易に問題を概観したにすぎない。だがしかし、少しでも多くの人に経済問題に関心を持ってもらい、理解してもらうことによって、いままでの経済発展がいかに一方に偏ったものであったかを、改めて考え直してもらいたいと思ったものである。本書が少しでも、そうしたことに役立つ一助ともなれば、それは著者としてはこの上もない喜びと感ずる。

本書の世界資本主義経済の発展過程を論じた第一篇は、神奈川大学経済学部での「アメリカ経済論」の授業で使った講義ノートの一部をもとにしており、第二篇の日本経済に関する部分は、鶴見大学文学部でおこなった一般教育科目「経済学」の講義を基礎にして書いたものである。先に『資本制経済の構造と発展』を出版した際（昭和五二年）、

そのいわば姉妹書として本書を直ちに出版する予定でいたが、大学で学科主任を任命されて思わぬエネルギーを費やさねばならなくなったことや、一身上の色々な事情が生じ研究が阻害されたこと、そして何よりも石油危機後の不況からの回復をもう少し見極めようとして、一時執筆を中断していたことなどから、かなり遅れてしまった。本来ならばもう一度整理し直したかった部分も多かったが、今後とも大学での「雑用」に追い回されそうな情勢にあるため、この際思い切って出版しようと考え、不十分ながら敢て世に問うことにした。批判と教示を迎えたい。

最後になったが、今回も税務経理協会の峯村英治氏に色々御世話になったので、ここに記して感謝する。また芝浦工業大学工業経営学科付書記の高橋清子女史には原稿の整理や図、表の作成に種々協力して頂いた。改めて御礼を申し上げる。なお拙ない一書ではあるが、昨年喜寿を迎えた父に、本書をささやかながら御祝として贈ることにしたい。

一九七九年（昭和五四年）六月

新宿歌舞伎町の自宅にて

菰淵正晃

目 次

はしがき

第一篇 戦後世界資本主義の経済構造と発展およびその崩壊

第一章	体制的危機の深化とアメリカによる単一支配体制の確立	3
-----	---------------------------	---

第一節	資本主義の体制的危機の深化	4
-----	---------------	---

第二節	アメリカの危機対応Ⅱ世界資本主義体制の再建と支配	8
-----	--------------------------	---

第三節	ドル援助とアメリカによる世界単一支配体制の確立	22
-----	-------------------------	----

第二章	国家独占資本主義	27
-----	----------	----

第三章	各国生産力の発展とアメリカ支配体制の弱体化	35
-----	-----------------------	----

第一節	各国生産力の復興と不均等発展の展開	36
-----	-------------------	----

第二節	アメリカ国際収支の継続的赤字とドル過剰化	47
-----	----------------------	----

第三節	ドル危機の発現	52
-----	---------	----

第四章	アメリカによる単一世界支配体制の動揺激化と崩壊	57
-----	-------------------------	----

第一節	ドル危機の深化とドル防衛	58
第二節	ベトナム戦争とドル危機のいっそうの激化	65
第三節	IMF体制の崩壊	76
第五章	現代世界資本主義経済の再編成	81
第一節	「ドル・ショック」から「オイル・ショック」へ	82
I	スミソニアン調整とその崩壊の道	82
II	世界的フロート制への移行	87
III	ドルの「たれ流し」と世界同時インフレの激化、ならびに原油価格の高騰	91
第二節	世界不況の出現Ⅱ高成長の終焉	96
第三節	日米通貨・通商不均衡の拡大	99
第四節	世界経済の再編成	107
第二篇	戦後日本経済の発展と破綻	
第一章	戦後わが国経済の破壊・混乱	119
第一節	アメリカによる日本経済の破壊（第Ⅰ期）	120
第二節	アメリカによる日本経済の「温存」、「育成」（第Ⅱ期）	124
第二章	戦災からの経済復興Ⅱ再建	127
第一節	朝鮮戦争と日本経済の復興	128

第二節	再建のための国家独占資本主義的諸政策……………	130
第三節	外国技術の導入と生産力の回復……………	133
第三章	技術革新の進展と日本経済の近代化・高度化……………	135
第一節	技術革新の進展（高成長の技術的条件）……………	136
第二節	銀行と産業との癒着（高成長の資金的条件）……………	140
第三節	神武景気から岩戸景気への展開……………	144
第四章	国際開放体制の進展と設備投資の強行……………	155
第一節	開放体制への移行とわが国企業の規模拡大……………	156
第二節	いざなぎ景気の展開と「経済大国」への発展……………	162
第三節	国際収支の黒字の定着……………	169
第四節	インフレの高進と円切上げ圧力の増大……………	179
第五章	高成長政策の「強行」と矛盾の顕在化……………	183
	——ドル・ショックからオイル・ショックへ——	
第一節	ドル・ショックとそれに対処した国家財政金融政策……………	184
第二節	日本列島改造政策と日本経済の最高水準への到達……………	189
第三節	高成長の強行にともなう社会的歪みの顕現……………	195

第六章 高成長の終焉と低成長の定着 201

—— オイル・ショックとそれ以降の局面 ——

第一節 オイル・ショックとそれにとまなう深刻な不況の現出 202

第二節 不況克服政策とその失敗 209

第三節 日米貿易の不均衡と円高基調 227

—— 日米通貨・通商戦争 ——

第四節 景気の回復への転換とインフレの再燃 241

カバー・本文イラスト

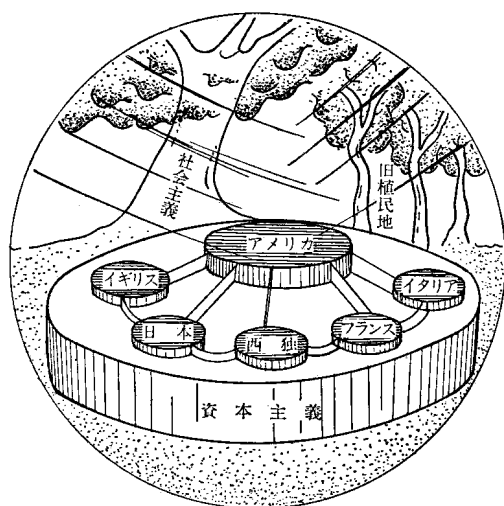
野村幸明

第一篇 戦後世界資本主義の経済構造と発展およびその崩壊

本篇は、第二次大戦後、世界資本主義経済がいかにしてアメリカを中心として統一的に再建されていったか、そしてかかる戦後の世界資本主義経済はいかなる過程を辿って発展していったかということを考察しつつ、この発展がどのようにして崩壊の道となっていたかということを究明する。

第一章 体制的危機の深化と

アメリカによる単一支配体制の確立



第一節 資本主義の体制的危機の深化

一九四五年終結した第二次大戦は、次のような点から資本主義体制そのものを根底から、いっそう震撼させるものとなった。

(1) 社会主義の世界史的発展

すでに一九一七年ロシア革命によって、地球は資本主義と社会主義との質的に異なる二つの体制に分裂し、資本主義はもはや全世界をおおう唯一の体制ではありえないものとなり、この時以来、資本主義はすでに体制としての危機の時代に入っていた。しかし社会主義は当時いまだ一国にすぎず、その経済的、政治的、軍事的力も弱かった。したがって資本主義としては、現実的には、社会主義については一応「無視」することもできた。しかし第二次大戦を契機として、社会主義はもはや一国にとどまらなくなった。大戦が終結するとともに社会主義はいくつかの国において建設され始めたのであり、しかもその経済力、政治的比重、軍事力はかつてのそれとは比較できないまでに増大し、資本主義といわば肩を並べるところまで強まってきたのである。したがって資本主義としては、もはやかつてのように社会主義を「無視」することはできなくなり、むしろたえず「意識」し、「対抗」していかなざるをえないものとなった。資本主義相互間の対立もここから一定の限界が画されることとなり、かつてのようにその対立が一直線的に軍事的衝突に突走するということは、もはや許されないものとなってきたのである。それが今日の資本主義にみられる

「協調」、「協力」基調を生み出しているのであって、「対立」の中にも「協調」姿勢が各資本主義諸国の根底を貫くこととなっているのである。だがそうした「対立の中の協調」、「協力の中での抗争」がみられるというのも、資本主義がそれだけ体制として追いつめられたということであり、体制としての基盤がいよいよ動揺せしめられるに至ったからにはかならない。

(2) 帝国主義的植民地制度の崩壊

かつての帝国主義諸国は世界のあらゆる地域に、自国の政治的抑圧と経済的束縛によって本国の利益に奉仕せしめる広大な植民地を領有していた。だが第二次大戦を契機として、これら植民地での民族解放Ⅱ独立闘争が激しく高揚し、これらの地域はしだいに政治的独立をかちとり、経済自立と開発の道を歩むこととなった。もちろんこれ以前にも独立闘争がなかったわけではないが、いまだそれは成功するところまでには至らず、政治的独立をかちとることはできなかった。植民地の領域に対する再編成こそおこなわれたものの、植民地からの解放Ⅱ独立、経済自立化ということは実現できなかった。しかるに今次大戦を契機として、植民地での民族解放Ⅱ独立闘争は以前にも増して激しく盛り上がり、本国の大戦での疲弊のいわば間げきを抜って次々にその目的を達成していくこととなった。そしてこうした運動の盛り上がりは、いまだ政治的独立をかちえていなかった植民地での民族運動をも刺激し、世界の歴史の大きな流れとなって展開していかざるをえなかった。

しかもそうした流れが、社会主義の世界史的発展という別の大きな流れの中で進展していくとなれば、民族解放Ⅱ独立闘争はまた社会主義の影響を多かれ少なかれ受けざるをえないものとなる。それだけに資本主義としては、もは